

外国人介護福祉士希望者の環境移行期における介護福祉実践の困難性の研究

一言語習得以外にも着目した総合的な支援の在り方ー

○東京家政学院大学 朝倉 和子 (006215)

西口 守 (東京家政学院大学・003468)

キーワード：外国人介護人材、環境移行、福祉人材育成

1. 研究目的

現在の日本社会における介護人材不足は深刻であり、経済連携協定（EPA）をはじめ、介護分野における外国人材の活躍が期待されている。本研究の目的は介護福祉士養成の専門教育を受け、介護福祉士の取得が前提である在留資格「介護」に注目し、日本語学校、介護福祉士養成校、国家資格取得の長期間の育成過程において段階別に留学生が抱く課題と必要な支援を明らかにすることにある。その際、A・ブラックワイス、F・ブレナンによる「直観タイプ」「知識タイプ」「実践タイプ」の学習者のタイプを参考とし、日本語能力のみにて評価されがちな留学生の日本語能力以外の能力を含めた総合的評価を目的とする。

今回は日本語学校から介護福祉養成校への入学を控えた移行の段階での課題と支援方法に着目した。

なお、本研究は、筆者が関わっている NPO 法人とベトナム日本語学校、日本の高齢者施設、日本語学校、介護福祉士養成校とが連携し、介護福祉士を目指すベトナム人留学生を育成するプロジェクトの一環である。

2. 研究の視点および方法

対象：2018年4月（2名）及び7月（2名）に在留資格「介護」を目的として来日し、高齢者施設にてアルバイトをしながら日本語学校に在籍するベトナム人留学生4名（男1：女3）。2019年4月より全員が介護福祉養成校へ進学。日本語能力は JLPT・N3 取得者1名、N4 取得者2名、N5 取得者1名（2019.1 現在）。全員が来日後に N3 を受験している。

期間：2019年1月25日～1月28日

方法：調査方法及び分析方法は質的データ分析法（佐藤 2008）に準じるが、対象者の日本語力の状況から、インタビューと同時にインタビューガイドを設問として提示し紙面によって回答もしてもらった。来日後約1年もしくは半年の段階で本人が抱く課題、進学に伴う課題を明らかにするための設問を中心とした。インタビューにおける回答と紙面による記述の中から、キーワード、カテゴリーを抽出した。

内容：①この1年（半年）で変わったこと、大変だったこと、②今、不安に思っていること、③来日前に準備をしておいた方が良かったこと、④介護の仕事で出来るようになったこと、⑤現在、抱く介護のイメージ、⑥介護福祉士取得のために必要なこと、⑦関係機関（日本語学校、介護福祉士養成校、NPO）にしてもらいたい支援。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、アンケート実施時に研究協力の承諾書を交わした。個人は特定されないこと、回答データについては研究結果として公表されること、内容について本人が確認できること、いつでも回答を拒否できること、研究責任者が厳重に管理すること等が含まれている。

4. 研究結果

アンケートの結果から留学生が現段階で挙げる課題として①日常生活・施設における成長、②環境移行への不安、③日本語・介護専門用語習得の困難性、④モデルとなる職員の存在、の4つの概念カテゴリーが抽出できた。

概念的カテゴリー	上位コード	コード
日常生活・施設における成長	<ul style="list-style-type: none"> ・自立・慣れ ・周囲からの励まし ・日本の文化、習慣、規則の理解の重要性 ・仕事内容の達成 	<ul style="list-style-type: none"> ・料理や掃除を自分でできるようになった。 ・日本の生活に慣れた。 ・職員、教師、利用者が励ましてくれる、 ・日本の習慣、規則を学んでおくことが大事。 ・(施設での)仕事も慣れてきた。
環境移行への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・養成校入学への不安 ・日本語力の不安 	<ul style="list-style-type: none"> ・養成校に行くが不安。 ・養成校での日本語、漢字、ルール、専門の言葉、勉強、先生が不安。 ・養成校入学のアルバイトが不安。
日本語・介護専門用語の習得の困難性	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語力の不安 ・介護専門用語への不安 	<ul style="list-style-type: none"> ・養成校での日本語、漢字、ルール、専門の言葉、勉強、先生が不安。 ・日本語学校での学習が大事。
モデルとなる職員の存在	<ul style="list-style-type: none"> ・モデルとなる職員の存在 ・情緒的側面からの介護職への理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員はいつもやさしい。幸せな顔。 ・職員は笑顔です。真面目です。 ・仕事場での経験が大切。

5. 考察

A・ブラックワイス、F・ブレナンは直観タイプの学習者を「自分のセンスもってはじめ。クライアントの情緒に対して容易に共感をもって反応する」としている。日本語習得が未熟な段階の留学生は直観タイプの学習者に共通する。介護の専門的業務内容の理論的理解はまだ困難であるが、介護職、対人職として重要な受容的態度や関わり方を職員の行動から学び、利用者に接し実践を試みる等、日本語能力以外（情緒や感性）の評価の重要性が挙げられた。また、教育環境移行時の主要な不安要因は本語力、介護専門用語であり、日本語学校、養成校、施設が連携し留学生自身が移行後の状況や達成事項を具体化できる支援方法の標準化確立の必要性が挙げられた。留学生の介護実践への動機付けのためにも、日本語力と同時に「能動的に介護職像のイメージを取得する力」を評価する必要がある。